

# 武漢大学留学報告

留学期間:2019年4月3日～5月18日

福島県立医科大学4年 鍋田 朗冊



図1. 武漢大学の図書館にて 左から鹿野光治、五十嵐盛滉、鍋田朗冊

## I.はじめに

私は2019年4月3日から5月17日までの45日間、福島県立医科大学の国際交流事業の一環として、中国の武漢大学に留学し勉強させていただきました。今回の留学では本当に様々なことを経験できたとともに、武漢での生活を通して中国という国をより知ることができたと思っています。この報告書を通じて、多くの方が武漢への留学や中国に興味を持っていただけたら幸いです。

## II.留学の目的・背景

今回私が留学を望んだ理由として3つほどの理由があります。一つ目は外国語についてです。日々日本にいただけでは英語を使う機会がないどころか動機付けになることも少ないため、留学を契機として英語もとい中国語の学習に力を入れたり、外国語を使う場に身を置きたかったです。二つ目は外国の医

療や医学教育について興味があり、それを実際に見て日本の医療との違いを目の当たりにしたいと考えたからです。特に中国は近年成長の著しい国なので、どれほどの水準の医療や医学教育が行われているか興味がありました。最後の理由は交流です。外国に長期滞在する機会は留学を除いてはなかなか得られぬものなので、留学を機に多くの学生や先生と交流し、自らの見識を広めたかったためです。また留学先の中で武漢大学を希望した理由として、基礎医学をもう一度学びなおしたかったため基礎医学を学べる武漢大学を選択し、留学させていただきました。

### III. 武漢での活動

#### III-1. 武漢、武漢大学について

武漢は長江中流域に広がる江漢平原の東部に位置する大都市であり、中国有数の文教都市及び工業都市です。街の中心部で合流する長江、漢口の二つの川によって、武昌、漢口、漢陽の3つの部分に分けられます。それぞれ武昌は政治の中心地、漢口は経済的な中心地、漢陽は重工業地帯として栄えています。

武漢大学は武昌に位置し、文学、法律、理学、工学、農学、医学の6大領域の学科を有する総合大学です。1893年に創設された自強学堂を前身とする中国で最も歴史のある国家重点大学の一つで、中国屈指の名門大学でもあります。大学は東湖の西端を挟むようにメインキャンパスと医学部キャンパスの2つに分かれます。メインキャンパスは医学部を除く5領域の建物が並び、いくつもの大運動場や図書館など広大な敷地と設備を誇ります。医学部キャンパスにも医学研究院や基礎研究院、臨床学院など様々な施設があり、武漢市の大病院の1つである中南医院に隣接しています。



図2. 武漢大学メインキャンパスゲート、6学科の文字が刻まれている

#### III-2. 武漢での生活

武漢では慣れないことばかりでしたが、武漢大学の先生方や学生の助けもあり、便利かつ快適に生活することができたと思います。私たちが滞在した寮、武漢の気候、食事、交通、また私が大変お世話になった武漢大学解剖学講座について、少しでも武漢での生活がイメージしていただけるよう説明させていただきます。

##### (i) 気候(Climature)

気候は春秋のないような暑いかわ寒いかわといった気候だと現地の学生は言っていました。実際留学初期は寒いように思えた気候も留学後半から段々暑く感じるようになってきました。また湿気が多く、よく雨が降る気候でもあります。

##### (ii) 寮(Dormitory)

私たちは武漢大学医学部キャンパスに存在する International Dormitory に宿泊しました。ここにはインド人留学生をはじめとして様々な国からの留学生が滞在しています。講義が行われる教室や第一食

堂、大学内のコンビニなどが近い立地で、昨年までと違い各自シングルルームでした。年度によって空いている寮が貸し出されるのかもしれませんが。調理場などもありましたが、中国語がわからなく食材なども調達できないため利用しませんでした。Wi-fi に関しては武漢大学の学生としての ID とパスワードが必要だったため、中国の学生の Wi-fi をお借りして使わせていただきました。寮での時間は主に講義の予習・復習や中国語の勉強に充てていました。

### (iii)食事(Lunch)

昼食の際、武漢大学の学生は大体コンビニや食堂を使っています。こうしたコンビニや食堂は日本と比べても非常に安価であり、また豆皮や熱乾麺など武漢の伝統的な食事も気軽に味わうことができます。

コンビニではパンや弁当だけでなく日用品なども多く揃っていました。武漢大学では寮で暮らす学生が多いためだと思います。またレジでは牛肉面や牛肉粉などの麺類、コーヒー類なども注文できます。

食堂は医学部キャンパスでは、第一食堂と第二食堂の二つの食堂が存在します。営業時間は朝 7:00~9:00、昼 11:00~13:00、夜 17:00~19:00 と 2 時間毎と決まっており、これのおかげで武漢では自然と食事のリズムが整った生活ができました。また、定食メニューでなく、好きな惣菜を選ぶスタイルで、

自分の好みで選べたり、栄養バランスを考えて食べられるのは嬉しく感じました。基本的に食堂では現金を使用することができず、学生や教員の ID カードにお金をチャージして、注文した際に機械にタッチする方式でした。私たち短期滞在の留学生は ID カードがなかったため、解剖学講座の唐先生のカードを貸していただき食事をしていました。食堂の支払いからもわかるように、中国ではキャッシュレスが進んでおり、実際に多くの方がレストランやコンビニにおいて Alipay や



図 3. 医学部キャンパス第一食堂にて

Wechat pay で支払いを済ませていました。普段現金を使う人の多い日本との違いを感じました。実際支払いが迅速で便利だとは感じましたが、私たち短期留学生や観光客にとってはおつりが常備されていない店もあるなど大変なことも多く、観光面を考えると利点ばかりではないと思います。

### (iv)交通(Traffic)

前述の通り武漢は大きな都市なので交通の便はとても整備されていました。バス、地下鉄、タクシーとどれも安価で市内の至るところまで通っていました。市内の至る所で工事が行われており、現地の学生の話では新しい駅も作っているとの話でしたので、これからはさらに発展していくと思われます。

まず市内を循環するバスは、どこで降りても 2 元(※1 元=約 16 円)という安さで市内を散策することができました。バスの路線は大変多いので紛らわしいのですが、先生から教えていただいた『智能公交』というアプリを使用することで、どのバスに乗るか、目的



図 4. 武漢市内を走る路線バス

のバスがどれだけの時間で到着するかなどを知ることができました。各路線のバスは10~15分おきにやってくるため、日本のような時刻表がないことも驚きでした。

地下鉄に関しては、すでに9路線ほど開通しており、市内に4箇所あるRail Stationや空港まで行くこともできます。日本の地下鉄と違い乗際には必ず手荷物検査があり、安全対策が徹底されている印象でした。また地下鉄の各駅で作れる交通カードはチャージすることで武漢のバス、地下鉄の両方で使用することができ、大変便利でした。中国では多くの人が『DiDi』というアプリを使ってタクシーを利用していたりと中国の人は武漢が都市だからかもしれませんが、日本以上に交通アプリを使いこなしている印象でした。

#### (v)解剖学講座(Anatomy Department)

武漢大学では、私の希望をくみ取っていただき、解剖学講座に所属させていただきました。解剖学講座はNo.7 Buildingの10階に先生方のオフィスがあり、その一室を私のオフィスとして貸してくださいました。授業のない空いた時間には、オフィスを使わせていただき、解剖の学習や講義の予習・復習をすることが多かったです。解剖学講座には、15人ほどの先生が所属しており、どの先生も非常に親切で世間話や武漢の観光地の話をしてくださったり、中国のお茶をごちそうしてくれたりしました。また、普段から私たち留学生を気にかけてくださり、食堂の使用や病院見学などのお願いも快く引き受けてくださいました。また最終週には、私たち留学生を夕食に連れて行ってくださり、街の紹介や学生たちについて色々なことを教えてくださいました。解剖学講座では学生への講義のほかには講座のほぼ半数の先生が基礎研究を行っており、ネズミを用いた循環の基礎研究などを行っているそうです。



図 5. 武漢大学解剖学講座の先生方と

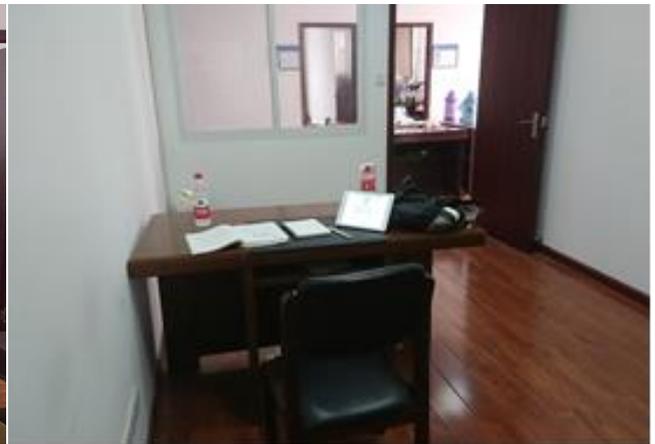


図 6. 貸していただいた留学生用のオフィス

### III-3. 講義への参加

武漢大学では様々な講義に参加させていただきました。午前は8:00から、午後は14:00から、1コマあたり45分の講義で、1日12、13コマまで存在するそうです。私たちは1日4~5コマほどの授業に参加していました。以下に一週間の私たちの講義日程に関する表や講義を踏まえて印象深かったことを述べていきます。

|             | Monday  | Tuesday | Wednesday | Thursday | Friday   | Saturday | Sunday |
|-------------|---------|---------|-----------|----------|----------|----------|--------|
| 8:00-12:00  |         |         | 病理学講義     |          | 解剖学講義・実習 |          |        |
| 12:00-14:00 | 昼食      |         |           |          |          |          |        |
| 14:00-17:00 | 免疫学講義   | 病理学講義   | 医学中国語講義   |          | 基礎中国語講義  | 解剖学講義・実習 |        |
|             | 医学中国語講義 |         |           |          |          |          |        |

図 7. 私たちが参加した一週間の主な講義内容(終了時間は講義によって違うため大体の時間)

### (i) 留学生医学講義(International Medical Class)

私たちは基本的に留学生用の解剖、病理、免疫の講義に参加しました。授業は英語で行われるため、度々出てくる医療英語に苦戦しましたが、これまで日本で学んだ知識の復習ができたり、新しく学ぶことも多かったと思います。共に講義を受ける留学生の多くはインドから来ており、他にもメキシコやシンガポールなど様々な国籍の学生がいました。彼らの多くはルーズかつマイペースで、講義に遅れてきたり、講義中にゲームの音が聞こえてくることもしばしばありました。実際先生から聞いた話によると留学生の中で医師免許の試験に合格できる学生はそう多くないようです。ただ一部の留学生は非常に真摯に勉強しており、講義中の先生の質問も難なく答えていました。私たち日本の学生は私も含めて間違いに臆して答えられないことが多いので、こうした点で刺激をうけることも多かったです。

解剖学の講義では留学生の 2 年生とともに解剖実習に参加させていただきました。留学生の解剖のクラスは 1 クラス 35 人で 2 クラスあり、同じ内容を違う時間に行うため、予定があっても別のクラスの講義に参加するなど臨機応変に講義に参加することができます。講義では、実習で同定する組織を中心に説明しており、その他臨床的知識も説明しており、臨床の観点から改めて解剖学の必要性を実感しました。

実習は各クラス 3 グループに分かれて行いました。1 グループ 12 名程度の中で実際に実習を行うのは 2 名ほどで他の学生は実習の風景を見ているだけということも多かったです。

後述する中国学生の解剖の実習と比較しても日本では 1 グループあたり少人数で実習を行っていたため、非常に恵まれていた実習環境だったと改めて感じました。実習はインド人留学生と共に協力して行いましたが、神経や動静脈を英語で言えないと協力するのが難しいので、事前に予習して実習に臨むよう気を付けていました。一回の講義につき先生は 3 人で、講義を行う主任の先生が一人と、実習を補佐する先生 2 人で解剖の知識を教えてくださいました。先生によっては学生からの要望があると、

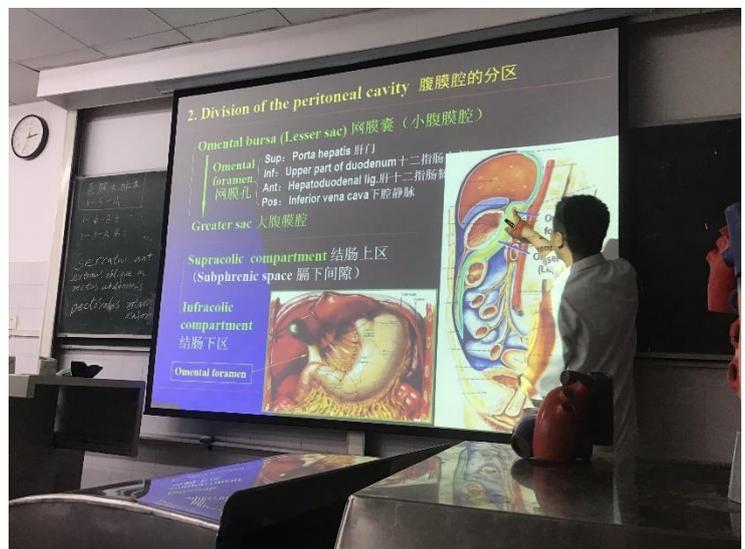


図 8. 解剖学の講義風景

先生自ら難しい部分の解剖をしていただけるので、重要な構造が鮮明に見ることができて勉強になったと思います。この留学中、視覚的に学習できる解剖学の実習は最も有意義で、かつ全ての臓器、神経、動脈を英語で覚える必要があったので、将来的に海外の外科医などと会話することを見越すと良い学習ができたと感じました。また、臨床医学の勉強をしていると解剖学の観点から理由付けできることも多く、改めて解剖実習できたことは有意義であったと感じています。

また、解剖実習に関して日本での解剖実習といくつか違いがありました。まず、日本では解剖実習書に沿って実習を進めていたのに対して、中国では先生が講義の最後で話す手順に沿って解剖をしていました。実習の手順がわからなかったので予習などは日本のようにテキストに沿ったほうがやりやすいと感じましたが、講義の最後に写真と共に説明を受け、かつ実習室内のビデオでその日の解剖の手順やポイントも確認することができるため、中国での解剖は大変イメージしやすいと思います。また、実習で使用していた器具も日本でのそれと違いがありました。日本で私たちは基本的にメス、ピンセット、鉗を使用していましたが、留学生たちはそれに加えて鉗子を使用していました。少し借りて使ってみましたが、慣れていない分使いにくかった印象があります。この鉗子は実際の手術でも使われるため、解剖実習で使用して多くの手術器具に慣れることができるのは利点だと思います。また、動脈に赤い乳液を流し、同定しやすくしていました。このように同じ解剖実習でも国によって様々な工夫があるのは興味深く感じました。

免疫や病理の講義にも参加させていただきました。内容のほとんどは日本で習ったことでしたが、講義で出てくる医療英語が難しく、わからない語句を翻訳しながらの授業に臨むことが多かったです。日本で学習した内容を復習するとともに医療英語を学ぶこともできました。

## (ii)中国語の講義(Chinese language Classes)

医学の講義・実習に加えて私たちは Basic Chinese と Medical Chinese の講義にも参加しました。共に講義を受ける留学生はすでに 1 年間中国語を学習しており、全く初学者の私たちにとっては理解するのは難しかったですが、語彙を増やすことはできたと思います。Basic Chinese では国際的な中国語検定である HSK の問題を使って学習しており、彼らのような中国にいる留学生はこの試験を受ける必要があるようです。Medical Chinese では中国語の医療単語を覚えた後、リスニングや医療単語を使った短文作文などを行っていました。中国語の漢字と日本の漢字は本当によく似ているので、学習しやすいところもあるのですが、中国語の発音はとても難しいためその点で学習しづらさを感じました。ですが、実際にこういった講義に参加することで中国語の学習への意欲が高めることができたと思います。



図 9. Medical Chinese クラスでの単語テスト

## (iii)中国学生との解剖実習

私は普段の講義のない時間に中国人学生の解剖の実習にも参加させていただきました。武漢大学では 1 年生からすでに解剖実習を行っており、私の参加した講義ではほぼ 100 人の学生が解剖実習を行って

いました。中国の学生は大変真摯に授業に参加しており、全員の学生が講義に集中し、自ら進んで実習に取り組んでいました。こういった学習への取り組みは、インドからの留学生だけでなく、私たちより真剣で、見習うべき点だと思います。中国クラスでも 8 人 1 グループで行っているようで、4 人 1 グループで行えている日本の方が学習環境の良さを実感したと共に、もっとその環境を私たち学生が生かしていないといけないと改めて思いました。

#### (iv)日本語の講義(Japanese Language Classes)

さらに、武漢大学では日本語の講義もあるとのこと聞いたので、どのように行われているか気になったので参加してきました。基本的に日本語の授業は武漢大学のメインキャンパスで行われており、土曜日の朝に Basic Japanese 午後に Japanese Composition、日曜日の朝にも Basic Japanese と主に休日に講義があるようです。このため案内してくれた学生は一週間ほぼ毎日のように授業があるようでした。このように武漢大学の学生は勉強に比重を置いており、部活動やバイトも行う日本の学生との違いを感じました。また、実際に私たちが武漢大学で出会った学生のほとんどは英語が堪能で、そのうえ日本語など第二外国語も使うことができる学生も多く、私たちよりも言語習得に熱心だと感じました。

### III-4 .病院見学

武漢大学には 5 つの大病院があり、そのうちの 2 つが武漢大学の附属にある中南医院と人民医院です。今回見学させていただいたのは、医学部キャンパスに隣接する中南医院です。中南医院は病床数 3,300 床もあり、福島県立医科大学附属病院と比べても遥かに病床数が多いことがわかります。病院内は廊下と呼べる場所にもベッドが配置されており、病床数の多さ含め、中国の人口の多さ故のことだと思いました。私たちは心臓血管外科の梁川医師にお世話になり、手術などを見学させていただきました。見せていただいたの



図 10. 見学させていただいた武漢大学附属中南医院

は大動脈解離の患者さんの動脈にステントを留置する手術で、私たちはまだ日本で臨床実習を行っていないため手術を見ることができたことは貴重な体験でしたが、日本と中国の違いが分かるほど日本の手術を見ていないのが悔やまれました。先生方の手元はほとんど見ることはできませんでしたが、CT 画像で疾患について説明していただいたり、モニター映像を見つつステントが入るところなどを実際に確認することができました。手術が終わると先生はほとんど休む暇もなく次の手術に向かわれました。中国の外科医は一日に 3~5 回もの手術をこなし、深夜まで仕事を行って医局に泊まることなどもあるそうです。医師の忙しさは日本同様中国も大変なようです。病院内を回った感想としては、安全面や衛生面ではまだ日本と比べると進んでない印象でしたが、第二臨床学院などの施設には臨床能力を育成するための練習室が多数あり、臨床能力を高めるために力をいれているようなところも見受けられました。

### III-5. 現地での交流

武漢大学では学生、教授など多くの方と交流することができました。こうした交流は普段日本にいたるだけではなかなかできるものではなく、私にとって大変貴重な出会いだったと思います。また、色々な学生と交流する中で、医学・語学の学習に対する刺激を受けたり、異なる考え方や中国から見た日本の印象なども聞くことができました。

#### (i) 交換留学生(高暉、尹晋雯、方燕、徐烈曦、金灵、何伟翔)

昨年交換留学で福島県立医科大学にきた学生たちが武漢の街を案内してくれました。具体的にはレストランに連れて行ってくれたり、大学の案内、市内観光、交通カードの作成、寮での Wi-fi の使用と、試験があり忙しい中にも関わらず、何度も手助けしてくれました。



図 11. 交換留学生との交流

#### (ii) 高塵怡、張婧琦、馮秦玉、吳釗儀、孫宇陽、瞿貝兒



図 12. 武漢大学の学生と参加した日本文化大会

彼女たちは武漢大学の日本語の勉強をしている学生たちで武漢のレストランやカラオケ、メインキャンパスの図書館に連れて行ってくれました。留学中はほとんどが英語での会話のため疲れることも多かったのですが、日本語を話すことのできる彼女たちとの会話は気軽に話すことができ、大変ありがたく感じました。また一緒に日本文化の大会など色々なイベントに誘ってくれました。彼女たちが作成した日本語の論文の添削などの手伝いも行っていただきましたが、すでに第二外国語で論文を書くことができるレベルの高さに驚愕しました。

#### (iii) 冷帆

冷帆は武漢大学の学生で、私たちの入学の手続きや生活の手助けをしてくれました。また、中国語のフレーズなども教えてくれた他、武漢大学や武漢の街についても色々なことを教えてくれました。彼を含め日本に興味をもって、日本語の学習までしてくれている学生も少なからずいる印象でした。

#### (iv) Bob、Bobo

彼らは武漢大学医学部の 1 年生たちで、私を中国語の解剖実習に誘ったりしてくれました。また、一緒に大学の食堂で食事などをし、お互いに日本のことや中国のこと、大学のカリキュラムについてを話しました。彼ら中国学生の多くは大学の寮で生活しています。これは中国各地から武漢大学に勉強に来ているため、武漢在住の学生が少ないためだと思います。医学部 1 学年のカリキュラムも学生にみせていただきましたが、毎日 12、13 限目まで授業があり、夜 8 時 9 時まで勉強しているそうです。中国の

学生は高校のときから同じ程度の量の勉強をしており、日本の学生と比べても驚くべきほど勉強に時間を割いていました。基本的に夜は自主学習の時間らしく、彼らは夜遅くまでコンビニで同級生と発表の準備をしていました。多くの学生が朝早くから夜遅くまで図書館で勉強していることもあり、中国の学生の真摯さや大学の医学教育への力の入れようには目を見張るものがあると思います。またカリキュラムに関しても日本との違いが見られたので、後にまとめたいと思います。

#### (v)インド人留学生



図 13.共に解剖を行ったインド人留学生たち

留学生クラスと一緒に講義を受けたり、解剖実習を行ったりするインド人学生たちとも食事に行き、それぞれの国の異なる文化について理解し合うことができました。実際、宗教上の理由で豚肉が食べられない学生がいたり、インドからの留学生の 1/3 ほどはムスリムでラマダーンの時期になると日の出ている間の飲食を絶ったりと文化の違いを間近で感じることができました。彼らは地元で養成学校がなかったり、授業料が安いなどの理由などで武漢に留学してきていると先生は仰っており、マイペースな学生も多いためストレートで医師免許を取得できない学生もいるそうですが、とても友好的

で共に実習や食事ができて楽しい時間を過ごすことができました。また、中国語の先生へのアポイントをしてくれたり、中国語の単語テストで読みを教えてくださいと何度も助けてくれました。

#### (vi)江川瀾先生

この留学中大変お世話になったのが、基礎中国語の講師江川瀾先生です。毎週、学食やレストランでの食事、クラシックコンサートなどに誘っていただき、先生のおかげで大変文化的な生活を送ることができました。また、その中で料理の注文の仕方、簡単な挨拶などの中国語を教えてください、武漢での生活がより円滑になり、中国の学習の動機付けにもなりました。また、先生は武漢の伝統的な食事や中国の学生、インドからの留学生について面白く話をしてくださったため、楽しくも武漢大学について多くのことを知ることができました。先生はご家族が日本にお住まいということで、また日本に来られることもあり、留学が終わった後でも交流ができるのはとても楽しみであります。



図 14. 大変お世話になった基礎中国語の先生

## IV.活動に対する考察

「Ⅲ. 武漢での活動」において述べたように、中国の医療や教育に関して様々な発見がありました。この項では、特に私が感じた「中国の学生の語学力の高さ」や「日本の医学部とのカリキュラムの違い」に

ついて日本との違いを含め深く調べ、考察していきます。

#### IV-1. 中国人学生の語学力の高さ

今回の留学中関わった学生の多くが英語を難なく話している印象で、武漢大学の学生の英語能力の高さが窺えました。この理由として日本と中国の英語教育に対する差異が考えられます。日本において小学校高学年の英語教育が小学校のカリキュラムに組み込まれたのは2011年からとされています。一方で中国では2001年よりすでに英語学習が小学校のカリキュラムに組み込まれており、児童は小学校からすでに英語に触れていたようです。このことからわかるように中国の学生は語学の習得に良いとされる早い時期から英語の学習を始めています。加えて中国の学校における英語の教育はコミュニケーション能力の向上を指針としており、ディスカッションなどの実用的な英語学習が組み込まれています。一方でこれまでの日本の英語学習は受験を見越して、リーディングやライティング、文法力の学習が中心でスピーキングの学習に乏しくなっていたように思います。こうした学習開始の時期やその内容によって中国の学生の高い英語力が育まれてきたと考えられます。日本も平成29年度の学習指導要領の改正を受けて、小学校中学年から英語学習の開始や授業時間数の増加、学習内容の明確化や改善が図られているため、今後日本の英語力も諸外国に劣らぬものになっていくことが期待できると思いますが、現状私たちに比べ中国の学生が英語力に富んでいるのはこうした理由からだと考えられます。

また、日本語の学習をしている学生の多くは日本のアニメなどをはじめとした文化に興味を持ち、大学で実施される土日を利用した講義で日本語のスキルを高めている印象でした。学生の日本への関心もありますが、実際に講義を受ける仕組みがあるのが魅力的だと感じます。こうした語学学習の講義は中国の多くの大学に設けられているようです。

他にも中国の学生は世界で活躍するために英語の学習が必須なことを認知しており、学生の語学に対するモチベーションが高いことも理由のひとつだと思います。実際 UNESCO が調査した「世界の海外留学生数」では2017年のデータで中国が一番多いという結果が出ています。そもそもの人口が多いなどの要因もあり必ずしも中国が一番とは言えませんが、ほぼ同様の人口のインドと比べても2.3倍の学生が留学していることから留学への意欲の高さが窺えます。また、中国の学生は留学などで海外に出ることに少なからずメリットを感じていることがわかりました。こうした留学に対する意欲や語学学習への取り組みの熱心さとして留学中にも感じることは多かったです。

#### IV-2. 中国の医学カリキュラムについて

日本の医学部が6年制であるのに対し、中国の医学部は5年制のコースと7年制、8年制のコースがあるようです。こうしたコースは入学時の成績で決まるようで、8年制のコースを卒業すると博士号が取れるそうです。博士号があったほうが大きな病院やより良い病院に就職できること、また学生がより高度な医療を学ぶ志向になっていることを理由に、多くの学生たちは8年制のコースでの博士号の取得を目指しているそうです。こうした博士号などの学歴が大きく就職に関わるのも中国の医学教育の特徴と言えると思います。8年制のコースの内容としてはでは1~5年で医学の学習をした後、残りの3年で臨床実習や研究などを行うそうです。個人的には、中国の医学部では多くの学生が研究に意欲的なイメージがあったのですが、日本のMD-PHDのように低学年から研究を行っている学生は多くはないようです。8年制の医学部コースでは、カリキュラム上で研究を行うため低学年の頃から研究を行う必要があまりな

いからかもしれません。日本での医学カリキュラムと比べると一年の折から解剖学を行うなど、早くから基礎医学の講義が始まっている印象でした。また 8 年制コースでは研究を行うため、多くの医師が学生のうちに研究の経験を多く積めるのも強みだと思いました。

## V. 留学を通じて

留学を通じて一番変わったのは中国への印象です。日本の治安が良いこともありますが、中国の治安や国民性に関しては、わからないことも多く不安なこともありました。しかし、実際に武漢に来てみると学生、先生、街の人の多くが親切で、大変良い印象を受けました。何より日本人と比べて積極的だと感じました。日本について多くのことを聞いてくれる学生や武漢について進んで教えて下さる先生、街でも興味を持って声を掛けてくれる方が多かったと記憶しています。そういった理由もあり、武漢では色々な人と本当に楽しく交流することができ、多くの中国学生や先生と親しくなることができました。私自身これが留学の強みだと感じており、個人的に海外旅行に行くことはあっても、なかなか今回の留学のように現地の方々とは交流することはできません。中国でできた友人たち、恩師たちが私にとってこの留学で得られた最も価値のあるものだと感じていますし、色々な人の考え方に触れることができました。また先ほどの積極性に関するものですが、中国の学生は、勉強することに関して大変意欲的でした。授業中の積極性、休日を利用しての語学学習、加えて毎日夜遅くまで図書館で勉強する様は大変尊敬できました。普段福島県立医科大学では、部活動やアルバイトに精を出す学生が多いため、対照的だと思います。どちらが良いとは決められるものではないのですが、進んで勉強に向かう姿勢など見習う部分も多いと感じました。見習うところは見習って今後の自分の生活の糧にしようと思います。

語学に関しては、普段の会話が英語のため、リスニングをはじめとする英語力が高まったと思います。また、現地で使われている中国語にも興味を持つことができ、日本に戻った後も継続的に学習できているほどのモチベーションが高まったのもこの留学で得られたものの 1 つだと思います。

また、少しですが、中国の医療や病院について知ることができたのも嬉しく思います。異なる教育制度や医師の仕事の仕方を学ぶ機会は多少あれど、学生のうちから外国の病院や大学を実際に見ることができたのは貴重な経験ができたと思います。今後医師として、中国の医師の先生とも多くかかわることがあると思いますが、そのなかでその国の医療の背景を知っていることでコミュニケーションや仕事における協力がより円滑になると期待しております。また中国の医療教育に対する姿勢は大変刺激をうけるものでしたので、今の自分の学生としての生活に疑問を持ち、改善し、生かしていきたいと思います。

このように私はこの留学で貴重な時間を過ごし、得るものも多かったと思っています。後輩の皆様も留学するチャンスが巡ってきた際は、ぜひとも留学に挑戦し、武漢でかけがえのない経験をしていただければと思います。

## VI. 謝辞

最後になりましたが、組織学講座の和栗聡先生、企画財務課國分美和様、教育研修支援課谷口様、佐久間様、また田先生、張先生、何先生、李先生をはじめとする武漢大学の先生方、病院見学でお世話になりました梁川医師、武漢大学で出会った学生をはじめたくさんの方々のサポートで無事留学することができま

した。心より感謝申し上げます、この報告レポートを締めさせていただきます。本当にありがとうございます。